

B 119 縄文土偶の結髪とその特徴について
東海学園女短大 尾関清子

目的 日本文化の基層を形成したと見られる縄文時代——この長い原始の時代において、女性がどのような生活と文化を形成し、また社会的な位置と役割をになつたかについては、言語による記録は勿論、口伝と覚しきものも皆無である。

従つてそれを明らかにする資料としては、貝塚・遺跡・遺物等に限定されざるをえない。とりわけ女性の服装・装身具・髪型を当時の食料等の生活資料と共に明らかにするためには、各種の出土品と併せて土偶の調査が重要な手がかりになると考えられる。

そこで今回は、土偶を主対象として、縄文期の女性の結髪について端的な考察を試みた。

方法 北海道・東北・関東・中部・近畿・九州各地域にわたる土偶の資料収集を行ない総数 967 莫の中から顕著な特徴を示しているもの 266 莫を選び次のように大別した。

- | | | |
|----------------|--------------|---------------|
| I 才カツパ頭らしきもの | II 一髻と見られるもの | III 二髻と見られるもの |
| IV 三髻と見られるもの | V 頭頂部に髻らしきもの | VI 後頭部に髻らしきもの |
| VII みずらと思われるもの | VIII 冠物らしきもの | ——の 8 種別である。 |

また、各種別ごとに、細部の特徴が類似するものをそれぞれ数種別に細分した。

結果 「火焰土器」と称されるわが風土固有の美的に卓抜した新石器文化を生んだ縄文女性が、多彩かつ複雑な結髪を創造していたことをひとまず立証できた。また、後母の弥生、古墳時代の結髪との関連、及び食料等の生活資料や技術が大陸から渡来したこととの関連等についても、今後の考察の手がかりを得ることができた。